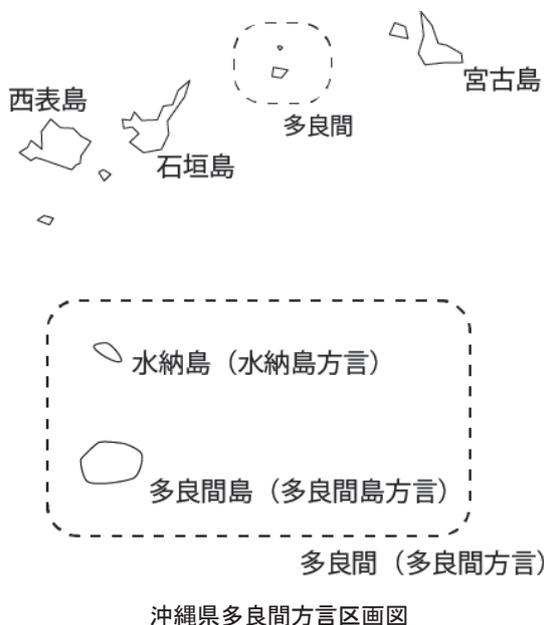


沖縄県多良間島方言



【多良間島方言について】「多良間」は南琉球の1地域であり、宮古島と石垣島の間に位置する多良間島とその北方約12kmの水納島とからなっている。この2つの島で話されていることばをそれぞれ「多良間島方言」「水納島方言」と言い、さらにその総称を「多良間方言」と言う。多良間島は村落の中央を走る境界線道路の西と東とで大きく「ナカスズ（仲筋）」と「シュガー（塩川）」という2つの集落（字）に分かれている。この両集落では例えば「棒」はパウボー、「買う」はカウコーというように異なる形式を用いるなど（いずれも仲筋—塩川）、語彙レベルでの音韻的な対立が見られる。ただし混同や語形の対立のない語も多く、また文法体系の面ではほとんど差異が見られないことから、本稿は両集落の言語を「多良間島方言」と総括的に扱っている。

多良間島から宮古島、石垣島までの距離にはあまり差がないのだが、史資料上は宮古島との関わりの深さの方が圧倒的に多く見出されている。だが、言語の面から言うと、多良間（島）方言には宮古方言と八重山方言それぞれとの類似点がみとめられる。特に、動詞は宮古方言系、形容詞は北琉球方言や八重山方言と同じサアリ系であるという形態論的な特

徴は早くから指摘されてきている。琉球方言の区画において多良間方言は「宮古方言」の下位に位置づけられるのが一般的となっているのだが、上記の特徴などにより、狩俣（1997）、かりまた（2000）ではその位置づけに疑問が投げかけられている。

また水納島は、交通の便の不便に加え、1961年10月、当時の琉球政府が行った宮古本島の平良市大野越（現在の宮古島市平良字東仲宗根添、通称「高野」集落）への移住政策によって人口が激減している。よって、現在水納島方言が話されている主な地域は高野となっている。水納島方言は多良間島方言に対して音韻的に異なる体系を示しており、いわゆる中舌母音*/i/*や*/l/*の音が*/i/*、*/ru/*に変化しているほか、*/N/*と*/M/*の区別もないため、多良間島方言よりも音韻の数が少なくなっている。なお、語彙、文法の面での差異はあまり大きくない。

【表記について】用例の表記は下地（2015b）で提示されている表記法（カタカナ）を用いる。例えばいわゆる中舌母音を含む音節は、*/i/*=イ°、*/ki/*=キス、*/gi/*=ギス、*/si/*=ス、*/(d)zi/*=ズ、*/tsi/*=ツ、*/fi/*=フィ°、*/mi/*=ムイ°、*/pi/*=ピス、*/bi/*=ビス、*/vi/*=ヴィ°のようにあらわす。またこれらの音節で終わる語に助詞*/ja/*が融合した音節*/Cɛː/*は「〇エー」のようにあらわす（例、ミツエー（道は））。また、単独で拍を形成する子音は*/N/* [*n, ɲ, ŋ, …*] = ン、*/M/* [*m*] = ム、*/L/* [*l*] = リ°とし、語頭の重子音は「ッ〇」（例、ツファ（子供））とする。

【調査概要】本稿の記述は、下地（2006）をはじめとする一連の拙論の記述および、筆者が調査・収集した言語資料に基づいている。すべての調査は沖縄県多良間島で生まれ育った高年層話者に行っている。また、多良間村役場（1981）の方言記述も音価の認定が可能なものに限り用例として用いる。例文末尾に〔民〕として示す。

沖縄県多良間島方言の活用表

《動詞：多段一般型》

	多段一般型 書く	多段一般型 待つ	多段一般型 干す	多段一般型 取る	多段一般型 食う	
終 止 類	断定非過去	カキ _ス カキ _ス ム	マツ マツム	プス プスム	トゥリ° トゥリ°ム	フー フーム
	断定過去	カキ _{タリ} ° カキ _{タム} ° カキ _ー カキ _{ッタ} (リ°) カキ _{タム} °	マツ _{タリ} ° マツ _{タム} ° マテ _ー マテ _{ッタ} (リ°) マテ _{タム} °	プス _{タリ} ° プス _{タム} ° プシ _ー プシ _{ッタ} (リ°) プシ _{タム} °	トゥリ° _{タリ} ° トゥリ° _{タム} ° トゥリ _ー トゥリ _{ッタ} (リ°) トゥリ _{タム} °	フー _{タリ} ° フー _{タム} ° フェ _ー フェ _{ッタ} (リ°) フェ _{タム} °
	命令	カキ	マテ _イ	プシ	トゥリ	フ _{アイ}
	禁止	カキ _ナ	マツ _ナ	プス _ナ	トゥ _{ンナ}	フ _{ーナ}
	意志	カカ カカ _ズ カカ _ム	マタ マタ _ズ マタ _ム	プシ _ヤ プシ _{ヤズ} プシ _{ヤム}	トゥ _ラ トゥ _{ラズ} トゥ _{ラム}	フ _{アー} フ _{アーズ} フ _{アーム}
	推量	カキ _ス ゲ _ー ライ カキ _ス パズ	マツ ゲ _ー ライ マツ パズ	プス ゲ _ー ライ プス パズ	トゥリ° ゲ _ー ライ トゥリ° パズ	フ _ー ゲ _ー ライ フ _ー パズ
	接 続 類	連体非過去	カキ _ス	マツ	プス	トゥリ°
連体過去		カキ _{タリ} °	マツ _{タリ} °	プス _{タリ} °	トゥリ° _{タリ} °	フ _ー _{タリ} °
中止		カキ _ー カキ _{ッテ} (イ) _ー カキ _{トウ} イ	マテ _ー マテ _{ッテ} イ _ー マツ _{トウ} イ	プシ _ー プシ _{ッテ} イ _ー プス _{トウ} イ	トゥリ _ー トゥリ _{ッテ} イ _ー トゥリ° _{トウ} イ	フェ _ー フェ _{ッテ} イ _ー フ _ー _{トウ} イ
仮定		カキ _ス (タ)カー カカバ	イ _ー (タ)カー マタバ	プス(タ)カー プシ _ヤ バ	トゥリ°(タ)カー トゥ _ラ バ	フ _{アー} (タ)カー フ _{アー} バ
理由		カカ _ッ ジ _ー カキ _バ	マタ _ッ ジ _ー マツバ	プシ _ヤ ッ _ジ _ー プスバ	トゥ _ラ ッ _ジ _ー トゥリ°バ	フ _{アー} ッ _ジ _ー フ _ー バ
派 生 類	否定	カカン カカマン	イ°ザン イ°ザマン	プシ _ヤ ン プシ _ヤ マン	トゥ _{ラン} トゥ _ラ マン	フ _{アー} ン フ _{アー} マン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	カカ _ス カカ _ス ミリ°	マタ _ス マタ _ス ミリ°	プシ _ヤ _ス プシ _ヤ _ス ミリ°	トゥ _ラ _ス トゥ _ラ _ス ミリ°	フ _{アー} _ス フ _{アー} _ス ミリ°
	受身	カカ _イ リ°	マタ _イ リ°	プシ _ヤ イ _リ °	トゥ _ラ イ _リ °	フ _{アー} イ _リ °
	可能	カカ _イ リ°	マタ _イ リ°	プシ _ヤ イ _リ °	トゥ _ラ イ _リ °	フ _{アー} イ _リ °
	尊敬	カキ _ー ワ _ー リ°	マテ _ー ワ _ー リ°	プシ _ー ワ _ー リ°	トゥリ _ー ワ _ー リ°	フェ _ー ワ _ー リ°
	継続	カキ _ー プリ° カキ _ー リ°	マテ _ー プリ° マテ _ー リ°	プシ _ー プリ° プシ _ー リ°	トゥリ _ー プリ° トゥリ _ー リ°	フ _ー プリ° (フ _ー リ°バ)
	希望	カキ _ス プ _ッ サーリ°	マツプ _ッ サーリ°	プスプ _ッ サーリ°	トゥリ°プ _ッ サーリ°	フ _ー プ _ッ サーリ°
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

《動詞：多段特殊型、一段一般型、一段特殊型、来る、する》

		多段特殊型 居る	一段一般型 見る	一段特殊型 死ぬ	来る	する
終 止 類	断定非過去	ブリ° ブム	ミーリ° ミーム	スニリ° スニム	クスー クスーム	スー スーム
	断定過去	ブタリ° ブダム	ミータリ° ミーダム ミー ミーッタ(リ°) ミーッダム	スニタリ° スニダム スニー スニッタ(リ°) スニッダム	クスタリ° クスダム キー キーッタ(リ°) キーッダム	スタリ° スタム シー シーッタ(リ°) シーッダム
	命令	ブリ	ミール	スニル	クー	シル
	禁止	ブリナ	ミーンナ	スニンナ	クスーナ	スナ
	意志	ブラ ブラズー ブランー	ミー ミーズー ミームー	スニ スニズー スニムー	クー クーズー	シュー シューズー シュームー
	推量	ブリ° ゲーライ ブリ° パズ	ミーリ° ゲーライ ミーリ° パズ	スニリ°ゲーライ スニリ°パズ	クスー ゲーライ クスー パズ	スー ゲーライ スー パズ
接 続 類	連体非過去	ブリ°	ミーリ°	スニリ°	クスー	スー
	連体過去	ブタリ°	ミータリ°	スニタリ°	クスタリ°	スタリ°
	中止	ブリー ブリッティー ブトウイ	ミー ミーッティー ミートウイ	スニー スニッティー スニトウイ	キー キーッティー キートウイ	シー シーッティー シートウイ
	仮定	ブタカー ブラバ(ドゥ)	ミー(タ)カー ミーバ(ドゥ)	スニ(タ)カー スニバ(ドゥ)	クス(タ)カー クスーバ(ドゥ)	ス(タ)カー スーバ(ドゥ)
	理由	ブラッジー ブリ°バ(ドゥ)	ミーッジー ミーリ°バ(ドゥ)	スニッジー スニリ°バ(ドゥ)	クッジー クスーバ(ドゥ)	シューッジー スバ(ドゥ)
派 生 類	否定	ブラン ブラマン	ミーン ミーマン	スニン スニマン	クーン クーマン	シュン シューマン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	プラス プラスミリ°	△ミーッスミリ°	スナス スナスミリ°	クスサス クスサスミリ°	《スミリ°》 《クスサスミリ°》
	受身	ブライリ°	ミーライリ°	スニライリ°	クライリ°	シライリ°
	可能	ブライリ°	ミーライリ° 《ミーリ°》	スニライリ°	クライリ°	シライリ° 《ディキリ°》
	尊敬	《ワーリ°》	ミーワーリ°	スニーワーリ°	《ワーリ°》	シーワーリ°
	継続	(アリーブリ°) (アリーリ°)	ミーブリ°	スニーブリ° スニーリ°	キーブリ° キーリ°	シーブリ° シーリ°
	希望	ブリ°ブッサーリ°	ミーブッサーリ°	スニブッサーリ°	クスーブッサーリ°	スーブッサーリ°
のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		高い	上手(だ)	学生[ガクセー](だ)
終 止 類	断定非過去	タカシャーリ° タカシャダーリ° タカシャーム	ジョーズ	ガクセー
	断定過去	タカシャータリ° タカシャーダム	ジョーズダタリ° ジョーズ(ドゥ)アタリ°	ガクセーダタリ° ガクセー(ドゥ)アタリ°
	推量	タラカシャーラズー タカシャーリ°ゲーライ タカシャーリ°パズ	ジョーズゲーライ ジョーズパズ	ガクセーゲーライ ガクセーパズ
接 続 類	連体非過去	タカシャーリ° (ブカラス)	ジョーズナ	《ガクセーズ》
	連体過去	タカシャータリ°	ジョーズダタリ°	ガクセーダタリ°
	中止	タカシャ タカシャーリー タカシャーリッティ	ジョーズ	ガクセー
	仮定	タカシャー(タ)カー タカシャーラバ	ジョーズアタカー ジョーズアラバ	ガクセーアタカー ガクセーアラバ
	理由	タカシャン タカシャーリ°バ	ジョーズアリー ジョーズアリ°バ	ガクセーアリー ガクセーアリ°バ
派 生 類	否定	タカシャ(一)ネーン	ジョーズ(ヤ)アラン	ガクセー(ヤ)アラン
	なる	タカシャナリ° タカフナリ°	ジョーズンナリ°	ガクセーンナリ°
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	尊敬	タカシャーリーワーリ°	ジョーズアリーワーリ°	ガクセーアリーワーリ°
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型の主なものとして、基幹多段型(以下「多段型」、基幹一段型(同「一段型」)がある。

多段型は、所属動詞が多い一般型のほかに、限られた活用形で特別な形を持つ特殊型がある。おおよそ、多段一般型には a 類のうち「書く」類が属し、多段特殊型は「居る」類、すなわち古典語のラ変動詞が対応する。

多段一般型動詞には、後述するハ行五段動詞を除き、基本語幹のみの動詞(k、g、b、v、f、s 語幹。ただし s は「切る」{kis} 1 語)と、基本語幹の他に変わり語幹を持つ動詞とがある。後者にはその変わり語幹のタイプが異なる 3 種—①破擦・摩擦音:「待つ」などタ行五段動詞に相当する語({t}/ {ts})と「言う」({i:}/ {iz}), ②口蓋化音:「干す」などサ行五段動詞に相当する語({s}/ {sj}), {z}/ {zj} (「怒

る」(バシヤツ)など)、{c}/ {cj} (「移る」(フツツ)など)、③成節的子音:「取る」などラ行五段動詞に相当する語({r}/ {L})と「読む」などマ行五段動詞に相当する語({m}/ {M})—がある。①の「言う」(イー)は *iwi の w が脱落し、共通語の i に対応する i に備わる「摩擦音のいちじるしさ」(かりまた 1986: 63)によって変わり語幹 {iz} が生じたものである。また③の {L} {M} について、それぞれその基本語幹 ri、mi から成立したと考えられる。

また、「食う」などハ行五段動詞に相当する語は他の多段型動詞とは異なるやや複雑な活用を示している。「食う」は kuwi の w の脱落后、連母音が融合し長母音化することによって断定非過去「フー」、過去「フェー」、意志「ファー」など、他の動詞の語幹に対応する位置に異なる母音 u、a、e が現れる。また「笑う」などいわゆる終止形の古形末尾音が *(war)awi と推定される語は、本来伸筋と塩川で

*barau—*baro: のように対立していたと考えられる。だが、現在は「買う」(kau—ko:)を除いて「食う」などと同じ{u:}/ {a}/ {e:}の活用型となっており、仲筋と塩川のauとo:の音韻的対立は動詞語彙に関してはほぼ解消されていると言える。

多段特殊型の「居る」「ある」について、断定過去形と連体過去形が「ブタリ[°]」「アタリ[°]」、仮定形が「ブタカー」「アタカー」となるなど、多段一般型③タイプの{r}/ {L}の動詞とは一部異なる形式をとる。

多段型動詞の基幹の種類を下に例示する。

「書く」 {kak}

ア段 kak·a 例「カカン」 kak·a-n

イ段 kak·i 例「カキッタ」 kak·i-tta

イ[°]段 kak·i 例「カキタリ[°]」 kak·i-tal

「待つ」 ① {t}/ {ts}

ア段 mat·a 例「マタン」 mat·a-n

イ段 mat·i 例「マティッタ」 mat·i-tta

イ[°]段 mats·i 例「マツタリ[°]」 mats·i-tal

「干す」 ② {s}/ {sj}

ア段 pusj·a 例「プシャン」 pusj·a-n

イ段 pusj·i 例「プシッタ」 pusj·i-tta

イ[°]段 pus·i 例「プスタリ[°]」 pus·i-tal

「取る」 ③ {r}/ {L}

ア段 tur·a 例「トゥラン」 tur·a-n

イ段 tir·i 例「トゥリッタ」 tur·i-tta

イ[°]段 tul (<tur·i)

例「トゥリ[°]タリ[°]」 tul-tal

「食う」 {u:}/ {a}/ {e:}

ア段 fa: (<kuw·a) 例「ファーン」 fa:-n

イ段 fe: (<kuw·i) 例「フェウッタ」 fe:-tta

イ[°]段 fu: (<fuw·i) 例「フータリ[°]」 fu:-tal

特殊「居る」 {r}/ {L}

ア段 bur·a 例「ブラン」 bur·a-n

イ段 bur·i 例「ブリッタ」 bur·i-tta

イ[°]段 bul (<bur·i) 例「ブリ[°]バ」 bul-ba

尾略 bu (lの脱落) 例「ブタリ[°]」 bu-tal

一段型には、b類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。a類の「死ぬ」も一段型に属するが、使役など一部の派生形式では特別な形をとる。一段型の一般的活用を一段一般型、「死ぬ」を一段特殊型とする。一段型動詞は、「ミーライリ[°]」 mi:-ra-il、「ミーリ[°]バ」 mi:-l-ba など、基幹(=語幹)

がイ段となる。北琉球方言とは異なりr語幹化が生じていない点は宮古下里方言と同じである(中本2014:149)。

以下では、単に「多段型」「一段型」とする場合、一般型、特殊型両方を指すこととする。

「キ^スー」(来る)、「ス^スー」(する)は、不規則な活用をする。「キ^スー」は、キー(k·i-R)、クー(k·u-R)、キ^スー(k·i-R)などのように、基幹が「キ」「ク」「キ^ス」の3形ある。「ス^スー」は、ス^スー(s·u-R)、シー(sj·i-R)、シュー(sj·u-R)などのように、語幹が{s}/ {sj}で、基幹が「ス」「シ」「シュ」の3形ある。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形には、基幹イ[°]段のみの形式と意志・推量を表す*mu(mo)に由来する接辞「ム」のついた形式の2種があらわれる。後者の形式は、多段一般型は基幹イ[°]段に、多段特殊型は基幹尾略に、一段型は基幹(=語幹)に「ム」が後接して形づくられている。この2種の形式は意味の面においても違いがみられ、基幹イ[°]段のみの形式が用いられると話し手及び聞き手、また第三者によっても認知されるような客観的表現となり、「ム」の形式が用いられると発話者自身の判断や意志の加わる表現となる。

・タローガ ズーユ カキ^ス(太郎が字を書く)

・バガ カキ^スムヨー(私が書くよ)

また、文の断定には基幹イ[°]段に助詞「ドゥ」が後接したものと動詞「ス^スー」がくみあわさった形式も用いられる。直訳すると「(届き)ぞする」となり、より強い断定が表される。

・ツヴァー タカシャーリ[°]バ カダカニーヌ
ムヌーマイ イカウドゥ ス^スー(あなたは
(背が)高いからあの高さのものも届くよ)

〈断定過去形〉

断定過去形は「タリ[°]/タ^ム」がつくもの、中止と同形のもの、「ッタ/タ^ム」がつくものという3タイプがあり、意味的には「普通過去」をあらわすものと「直前過去」をあらわすものとに分けられる。「書く」を例に挙げると、「カキ^スタリ[°]」と「カキ^スタ^ム」、「カキ^スー」は普通過去を、「カキ^スッタ」と「カ

キッタムは直前過去をあらわす。なお直前過去とは、「<現在>に何らかの関わりをもつ<過去>」、特に発話時点の「<直前>という時間的意味」を指している(下地 2006:196)。このテンス的意味をあらわす形式は宮古諸方言にはみられない。また、普通過去の「タリ」は古典語の「たり」に対応する接辞であり、「タム」はそれに *mu(mo) が融合したものである。

- ・ウリガ ウヤガドゥ キスタリ ティーヨー
(その子の父親が来たってよ)
- ・アバー チャントゥ シミタム ドー (私はちゃんとしめたよ)
- ・ドゥストゥ エー (友達と喧嘩した)
- ・クレー イー クトゥードゥ キキッタリ
(これは良いことを聞いた)
- ・ユイガマー ムメ フェウッタム (タご飯はもう食べた)

〈命令形〉

動詞の類によって語尾が異なっており、多段型は語幹+i (=基幹イ段のみの形。ただしハ行五段動詞に相当する語は -Cai となる)、一段型は基幹 (=語幹) +ルである。また「来る」は「クー」、「する」は「シル」となる。これらは相手への強い働きかけ(狭義の命令)を表す形式であるが、終助詞「ヨー」を伴うと働きかけの度合いが弱まり、やや柔和な表現となる。

- ・ペーパー ヌミ (早く飲め)
- ・カギーチャー アライ (きれいに洗え)
- ・ヤムユバ パニカイシー イキルヨー (病気ははね返して生きなさいよ)

また、表には含めていないが相手に動作を促す「(カカ)ダー」という形式もある。多段型動詞は基幹ア段に、一段型動詞は基幹(=語幹)に接辞「ダー」がつく。「来る」は「クダー」、「する」は「シュダー」となる。

- ・ムメピ トゥラダー (もっと取って)
- ・テレビヌ クイユ イミッチャ シュダー
(テレビの声を小さくして)

〈禁止形〉

基幹イ段に接辞「ナ」が後接した形式が用いられる。多段型③、一段型の動詞の場合、「ナ」の直前の「リ」は「ン」に変わる。

- ・ウマー アナブリ アリー ウマンケーヤ
イクスナ (そこは穴だからそこへは行くな)
- ・イシマセー クイバム ピストウマセー ク
インナ (石囲いは越えても人囲いは越えるな)
[諺]

〈意志形〉

接辞なしの形(多段型は基幹ア段のみ、一段型は基幹(=語幹)のみ、「来る」は「クー」、「する」は「シュー」と、接辞「ズー」、接辞「ムー」それぞれが後接した形の3形式がある。接辞なしの形は主語(動作主体)が複数か単数かによって、勧誘または動作主体の意志のいずれかがあらわされる。一方、ズーの形は勧誘としては用いられず、単数主体の意志を表す用法を一次的とする。またズーの形は、第三者について述べた文の主節で推量の意味を表すことができるが、近い未来、あるいは進行中の(と思われる)コトガラに限られ、その使用には制限が見られる。

ムーの形は m (*mu) が陳述性に関わる要素であることに関わって、より強い意志をあらわす形式となっている。

- ・ジュー ヅヴァマイ マーツキ イカ (さああなたも一緒に行こう)
- ・ムメ スグ タローターガ クズー。ウンガミ マティーラズー (もうすぐ太郎たちがくる。それまでは待てよう)
- ・クルーダム、ヅヴァガ ヌギスタカー ミシ
ムー (これをあなたが抜いたら(その女を)見せよう) [民]

〈推量形〉

断定形に終助詞「ゲーライ」、「パズ」が後接している。なお、表には、基幹イ段にゲーライ・パズが付いた形のみを挙げているが、もう一つの断定形「基幹イ段・ム」にゲーライ・パズが付いた形も可能である。「パズ」は形式名詞的に用いられる共通語の「はず」に対応するが、多良間島方言では文末に位置して「きっと〜だ(ろう)」という推量の意味を表す用法しか持たず、終助詞化している。ゲーライの形よりもパズの形の方がやや確定的な表現になるようだが、推量の根拠となるモノゴトが文脈や言語外現実に示されている必要はなく、やはりその確定性は低い。

- ・イキ_ス ギ_スーヤ アリ°ゲーライ (行く義理はあるだろう)
- ・クスカニー タル°パズ (これだけで足りるだろう)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、断定非過去の基幹イ°段のみの形式と同形である。

- ・カ_キ°ス ピ_ストー ターガ (書く人は誰か)
- ・ウレー ミー°リ° ムヌ (それは見るもの)

一段型について、この類の動詞が複合名詞の前部要素となる場合「基幹 (=語幹) +名詞」となるのだが、連体修飾の用法でも基幹があらわれることがある。これは特に、個別的な時間が捨象された一般的なコトガラが表されている場合に多い。

- ・ティン ミー° ガラシャ (天 (を) 見る鳥)
- ・ウリ°ヤ ム°ナ° ピ_ストウ ト°リ° ヤー
スシュ ダタリ°、エー スニドウ トウス
ダタリ°ティー (それはみんな人 (が) 倒れた
飢饉だった、えー、死んだ年だったって)

前の用例の「ミー」は目的語「ティン」をとっており、よって複合名詞の前部要素ではないことがわかる。後の用例についても、先の下線部「トリー」は程度副詞「ムナ」に修飾されていること、後の下線部「スニ (リ°)」は後続の名詞「トウス」との間に助詞「ドウ」が入り込んでいることから、いずれも複合名詞の要素ではない。

よって、一段型動詞の連体非過去形には2つの形式がみとめられる可能性がある。

〈連体過去形〉

連体過去形は普通過去の「タリ°」のつく形式と同形の1形式のみである。

- ・ユビ キ°キ°スタリ° パナス (タベ聞いた話)

〈中止形〉

中止形には3つの形式がみられる。「書く」を例に、以下「カキー」を第1中止形、「カキッテ (イ)ー」を第2中止形、「カキ_ストウイ」を第3中止形と呼んでいく。1中止形について、多段型は基幹イ°段の末尾が長音化した形、一段型は基幹 (=語幹) のみ、「来る」は「キー」、「する」は「シー」となる。なお一段型のこの形には末尾母音に長短の揺れがみとめられる。第2中止形は、多段型は基幹イ°段に、一段型は基幹 (=語幹) に接辞「ッティー」が後接し

た形となる。「来る」は「キ_スッティー」、「する」は「シ_スッティー」となる。また第3中止形は、多段一般型は基幹イ°段に、多段特殊型は基幹尾略に、一段型は基幹 (=語幹) に接辞「トウイ」が後接した形となる。「来る」は「キ_ストウイ」、「する」は「ストウイ」となる。

- ・キ_スデークニウ キ°ス°ダ°ミ°、アッヴァシー
ニータリ° (人参を刻んで、油で炒めた)
- ・イナウ クル°シ°、ウリ°ガ アカツ_ユ°マ
ミ°ッ°テ°イ°、((男は) 犬を殺して、その血
を (刃に) 塗って、) [民]
- ・アンナ、トウズトウ カタル_{タリ}° ネーン
ム°ッ°ト°ウ°イ° イキ_ス°バドウ、(母、妻と話し
合った通り (お金を) 持って (その場所へ)
いくと、)

用法の違いについて、いずれも文の中止に用いられるほか、第1中止形は補助動詞とくみあわさって文法的な派生形式をつくるベースとなる。また同じ「中止形」でも第2中止形の方がより明確に文の中止を表すことができる。また第3中止形は、<ある動作が行われながら主文がさししめすコトガラが実現している>というニュアンスを帯びる、アスペクト的な語形である。だが、共通語のシテイルのように動作の進行、状態の継続を直接的に表しているわけではなく、単なる中止の用法の用例も現れている。

語構成について、まず第1中止形は、狩俣 (1997)、『沖縄古語大辞典』の「解説篇」、高橋 (1997) の記述などから、「連用形+アリ」に対応すると考えられる。オモロなどの動詞の「連用形+あり (やり)」には「完了」と「中止」の用法があり、多良間方言の第1中止形 (および普通過去の「カキー」の形) と同じである。また第2中止形について、狩俣 (1997) に宮古平良方言の「第3中止形 (多良間方言の第2中止形に対応—引用者注) は、jumisti 「読んで」という形も使われる」という記述があり (p.397)、「連用形+して」に対応する形式であることが示唆されている。また第3中止形は、石垣方言の動詞「継続形」の「連用形」が意味的に対応しているようである (宮城 2003: 46-47、例. jumiri 「読んでいて」)。石垣方言のこの形は「～ながら」「～ている」「～ているので」という意味を表すとされているが、多良間方言の「(カキ_ス) トウイ」の形にも同様の意味・

用法がみとめられる。ただし、「(カキ_ス) トウイ」には共通語の「テ」に対応する要素が含まれていると考えられることから、形態的には対応していない。また多良間方言の継続形の中止形には別の形式(「(カキ_イ) プリ」)が存在する。

以上のことから、多良間方言のそれぞれの中止形の語構成は以下のようなものが想定される。

第1中止形 *(kaki)ari

第2中止形 *(kaki)sjite

第3中止形 *(kaki)tewori

〈假定形〉

接辞「(タ) カー」のつく形と「バ(ドウ)」のつく形の2種の形式があるが、(タ)カーの形が主に用いられる。多段型は基幹イ[°]段、一段型は基幹(=語幹)に後接し、「来る」は「キ_ス(タ)カー」、「する」は「ス(タ)カー」となる。また、「ティカー」という異形態もある。

・カヌ ツズウ クイタカー ^ムメ スグドー
(あの丘を越えたらすぐだよ)

・ワーヌドウ スー ツフィティカー、アラス
ピラフヌ マイヤフツ (豚が巣を作ると嵐寒
さの前兆) [民]

バの形はその使用に個人差、年代差が見られ、(タ)カーの形よりも古い形式だと考える。多段型は基幹ア段、一段型は基幹(=語幹)に後接し、「来る」は「キ_スバ」「ク_スバ」とも、「する」は「ス_スバ」となる。

・クヌ フシュリ[°]ウ ヌマバドウ ノーリ[°]
(この薬を飲めば治る)

〈理由形〉

いわゆる「順態接続」をあらわす形式であり、系統の異なる2種の形式があらわれている。「書く」を例に挙げると「カカ_スジー」「カキ_スバ(ドウ)」となるが、前者の形式は意志形のズーの形に由来するものと思われる。また、このズーに由来する形はさらに「バ」を伴うことができる(この時、「-バ」の直前の「ッジー」の音は短母音化することが多い)。「バ」を伴うと明確に連用節であることがあらわされる。

・クカラフヌシューユ ツフィー ウ_スエ_ス
シャ_スッジー ナグラシトウ ニラウ ト
ミー クー (命名式の汁を供えるから枝サン

ゴとニラを探しておいで)

・ミイ[°]ーツ カー_スッジバ クヌ ^ムム_スマイ
シュイル (3つ買うからこの芋もおまけしな
さい)

また後者の形式は基幹イ[°]段に「バ(ドウ)」が後接したものである(多段型、一段型)。先のズーに由来する形が主体=発話者の主体的な判断の根拠をあらわすのに対し、この形は一般法則や継起的な出来事をあらわすのに用いられる。

・ピンダズルンケーヤ ヤトウーフシャウ
シュイリ[°]バドウ ^ムマ_ス ^ムマ_ス ファーイ
リ[°] (山羊汁にはヨモギを添えると美味しく
食べられる)

・〜ティ_ス ピント_スバドウ、カミディマス
ヌ ^カム_スベ_ス ^ムティ_ス シンジトウイ、
(男が)〜と返事をすると、(ユイキの神は
それを)カミディマスの神だろうと信じて、)
[民]

なお北琉球方言の理由形の「クトウ(ノグトウ)」に対応する形式は、多良間島方言では否定の中止用法をあらわす形式であられる(「グトウ」)。

・クヌ シャキウバー ヌマングトウ ヌク
シー ウキ_ストウイ クシュン ナシャ (こ
の酒は飲まないで残しておいて古酒にしよ
う)

〈否定形〉

多段型は基幹ア段、一段型は基幹(=語幹)に接辞「ン」「マン」が後接した形が用いられている。「来る」は「ク_スン」「ク_スマン」、「する」は「シュン」「シューマン」となる。

これらの2形式は断定形の「^ム」がつかない形式とつく形式との間にみられる陳述性の違いに対応しており、「ン」の形は客観的、「マン」の形は話し手の判断・意志の加わった表現となる。

・アガ ビキド[°]ムヤ シャキウ ヌマンヨ_ス
(うちの夫は酒を飲まないよ)

・アンヤ キューヤ シャキウ ヌママン (私
は今日は酒を飲まない)

〈丁寧形〉

多良間島方言の動詞には丁寧形に該当する形はみられない。

〈使役形〉

多段型は基幹ア段に、一段型は基幹(＝語幹)に接辞「ス」「スミリ[°]」が後接して形づくられる。なお「パナス」(話す、離す)など語末が「aス」である動詞の場合は「-(ス)ミリ[°]」の形のみを持つ。「来る」の使役形はイ[°]段に「サス」「サスミリ[°]」が付いた形となる。「する」の使役形には「スミリ[°]」が用いられる。

一段型動詞の使役形について、「ス」と「スミリ[°]」のいずれの形式でも基幹(＝語幹)と接辞の間に促音がはさまれて発音されることが多い。スの形の命令形には、多段型 s 語幹と一段型(あるいは「する」型)の2系統の語形があらわれる(例「探させる」多段型「トゥミッシ」、スル型「トゥミッシル」)。

その他、「着る」(キーリ[°])、「見る」(ミーリ[°])など基幹(＝語幹)が1音節である一段型動詞の使役形は他の動詞とは異なるふるまいを見せている。例えば「着る」の使役形には多段型動詞の「切る」(キ^ス)と同じ形式が用いられ、「キーリ[°]」を基とする形はあらわれない。

・ツファン ドゥーニー キ^スンユ キ^スサス
(子供に自分で服を着させる。)

・ヤラビン ウブニウ キ^スサス (子供に大根を切らせる。)

「見る」の使役形は「見させる」(ミー^スミリ[°])だが、使役形よりも他動詞「見せる」(ミシリ[°])を用いるのが普通である。

また「死ぬ」(スニリ[°])の活用型は基本的に一段一般型動詞と同じであるが、その使役形は多段型と同じ子音語幹型({sɪn})を語幹とする型)のア段形で派生している。

・ツファウ イフシャン スナスタッロー (子供を戦で死なせたよ)

〈受身形〉

多段型動詞は基幹ア段に接辞「イリ[°]」(異形態「リリ[°]」)、一段型動詞は基幹(＝語幹)に接辞「ライリ[°]」(異形態「ラリリ[°]」)が後接して形づくられる。共通語の「れる」に対応する接辞であり、もともとの形は「リリ[°]」の方だと考えられるが、/r/の脱落した「イリ[°]」の方が多くられる。「来る」は「クライリ[°]」、「する」は「シライリ[°]」となる。

・スグトゥーバ クマヤキタカー プミライリ[°]
ドー (仕事は丁寧にしたら褒められるよ)

・アガイ、ヌーガ シューズーガ、-ムメ ウリ[°]
ン フアーイバドゥ (ああ、どうしようか、もうこいつに食われたら) [民]

〈可能形〉

共通語の多段型動詞(五段動詞)では「飛ぶー飛べる」のような基本態と新参の可能動詞の対立が一般的なものとなり、受身形(*トバレル)と同音の可能形はほとんど用いられない。だが多良間島方言ではどの類の動詞も受身形と同音の形式があらわれている。

・アシャムヌーウ スコーリッティーカラ イ
ディライリ[°] (朝ご飯を支度してから出かけられる)

なお「ミーリ[°]」(見る)には、同形の可能動詞「ミーリ[°]」と可能形「ミーライリ[°]」の2つがある。前者は「見える」に、後者は「見られる」に対応する形式である。

また共通語の「できる」、「わかる」に相当する形式も、「する」(スー)、「知る」(ツスー)に接辞「-イリ[°]」が後接した形式が用いられている。なお、近年は共通語からの類推によって生じた新語「ディキリ[°]」(できる)も用いられている。

・アンー ヌーガ シライリ[°] ナーティー
イーターカー、(私に何ができるねと言ったら、)

・スーヤッサーリ[°] ミツ アリー ムメ ナ
ラーバ ツサイリ[°] ダラーナー (分かりやすい道だからもう習ったらわかるだろうよ)

〈尊敬形〉

第一中止形に補助動詞「ワーリ[°]」がくみあわさって形作られる。

・スツウブナカンヤ ツカサー ウブギンユ
キー ワーリ[°] (スツウブナカには司(≒神女)は神衣を着なさる)

また、「行く、来る、いる、言う」に相当する動詞の場合は「ワーリ[°]」が、「食べる、飲む」は「ンカギリ[°]」「スキライリ[°]」が用いられる。これらはいずれも語彙的な尊敬動詞であり、「ンカギリ[°]」「スキライリ[°]」は、聞き手が敬意の対象となる場合、さらに補助動詞「ワーリ[°]」がくみあわさる。

・シューヤ カフンドゥ ワーリ[°] (おじいさんは家の畑にいらっしゃる)

・ウイピトウヌ ワーリ° クトー イグン
ティ キスキョー (お年寄りのおっしゃること
とは遺言と聞きなさいよ)

・シュー、ムヌー ンカギ ワーリ (おじいさん、
ご飯を召し上がってください)

「スキライリ°」について、高橋(1993)はこれを「食
べる・飲むの最敬語」(p.112)とし、謙譲の敬体語
彙動詞「スキリ°」(差し上げる)の「未然形」に接
辞「ライリ°」が後接して派生したものと捉えている。

〈継続形〉

第一中止形と補助動詞「ブリ°」がくみあわさって
形づくられており、両者が融合した形式と、融合し
ない形式とがある。前者を融合形、後者を分析形と
呼んでいく。「書く」を例に挙げると融合形は「カキ
ーリ°」、分析形は「カキーブリ°」となるいずれの類の
動詞も両形式をもっており、さらに、それぞれに置
きかえることも可能であることから、両者は併用さ
れていることがわかる。ただし、「見る」(ミーリ°)
など基幹(=語幹)が1音節である一段型の場合は
原則的に分析形しか現れない。想定される融合形が
断定非過去の基幹イ°段のみの形式と同音形式とな
るためと考えられる。

・カメー センネンガミ イキーブリ° ティー
(亀は千年まで生きているそうだ)

・ウブニシャイヌドウ ガギンナニー ニニー
リ° (芝生で大きな青年が寝ている)

・ツファヌ 〰ムメー テレビウ {ミーブリ°
〰xミーリ°} (子供たちはテレビを見ている)

〈希望形〉

多段型は基幹イ°段に、一段型は基幹(=語幹)に
接辞「ブッサーリ°」が後接してつくられる。「来る」
は「キョーブッサーリ°」、「する」は「スーブッサー
リ°」となる。サアリ形容詞「ブッサーリ°」(欲しい)
が派生接辞化したものである。

・シャビ_ンシャビ_ンティエヌ スルー フーブッ
サーリ° (さっぱりした汁を食べたい)

・ツヴァガ カタフタン ビーブッサーリ° (君
の隣に座りたい)

〈のだ形〉

多良間島方言の動詞にはのだ形に該当する形はみ
られない。

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

いわゆるサアリ型であり、「語根+シャ・サ+アリ°」
という基本構造をもつ。

高い taka+sja+aL タカ-シャ-アリ°

安い jas+sa+aL ヤス-サ-アリ°

sja と sa について、これらは共通語の名詞化接辞「サ」
に相当するものである。この方言では共通語の「サ」
に口蓋音 sja が対応することから sja が基本的なタイ
プであり、sa はその直前の音が促音であるため口蓋
化を免れたものである。すなわちこの sja と sa の別
は古典語のク活用、シク活用には対応していない。
また、語根のあとが cja, ra であらわれる語もあるが、
これらは名嘉真(1983)が示した次のような順行同
化現象の結果生じたものとする。(引用は名嘉真
1992:605より)

*atsija:m→attja:m 《熱い》

*kalja:m→kalla:m 《軽い》

よって、cja, ra の形式は sja の変種と位置づけるこ
とができる。

また活用について、aL は存在動詞「アリ°」(ある)
が文法化したものであり、そのため形容詞の活用体
系には「アリ°」と重なるところが多い。だがその中
核的な機能の違いから、特に述語となる形のヴァリ
アントは「アリ°」よりも豊かではない。

その他、多良間島方言の形容詞にはサアリ型の活
用形とは別に語根(感情形容詞では語根+ス)を2
つ並べるタイプの語形もあらわれる。

・ナツ アリー ミダ アカアカー (夏だ
からまだ明るい)

・ウポーウプヌ クイシー ナーユ アビリー
(大きい声で名前を呼んで、)

〈断定非過去形〉

断定非過去形にはまず、動詞と同じく接辞「ム」
を含む形と含まない形とがある。さらに、「ドウ」と
「アリ°」が融合した「ダーリ°」の後接する形があ
る。稀ではあるが、この形は「ドウ アリ°」という
分析的な形であられることもあり、「ム」を含ま
ない形式の強調形と位置づけられる。また「ム」を
含む形式について、形容詞文の場合はそれが話し手
の内的判断であること、すなわち、話し手の主体性
が顕在化した表現となる。

- ・クヌーレー カビ^ババナウ ツファイリ[°] ピ
ストー イキラシャーリ[°] (最近は紙花を作れ
る人は少ないよ)
- ・クヌ テレベ^ー タイガイ タカシャー^ム
(このテレビは多分高い)
- ・カレー カラフツ アリー ウンシーニーヤ
アパシャダーリ[°] (あの人は辛口だから、そ
れでは薄いよ)

〈断定過去形〉

断定過去形には、終止非過去形と同形となる接辞「^ム」を含む形と含まない形の2形式がある。

- ・アンタガ シューヤ ティーヌ クマヤキ
シャータリ[°] (うちのおじいさんは手が器用
だった)
- ・ウヌ テレベ^ー タカシャータ^ムドー (その
テレビは(思ったより)高かったよ)

〈推量形〉

動詞の意志形の接辞「ズ^ー」がつく形に対応する形式と、断定形に終助詞「ゲーライ」、「パズ」が後接する形式とがある。なおズ^ーの形は後ろ2つの形式よりも使用頻度が低く、あまり用いられない。

- ・アター パリドゥ スバ ヌフシャーラズ^ー
(明日は晴れる(と言っている)から暖かい
だろう)
- ・イ[°]ズウヌ タイリョー ストウイドウ マツ
ヌ ウリシャバキヌ ニフシャーリ[°]ゲーラ
イ (魚が大漁で市場の売りさばきが遅いのだ
ろう)
- ・ウレー タカシャーリ[°]パズ (それは高いだろ
う)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去の接辞「^ム」を含まない形式と同形であるが、心理的な状態をあらわす形容詞に限り「語根+サ」に接辞「ス」のついた形式が用いられる。すなわち、連体非過去形をとる形容詞の語彙的意味の違いによる形態的な対立がみとめられる。また、^ムなしの形は被修飾名詞の「特性」をあらわす(=質規定)のに対し、ス^ムの形は表現主体の「感情」(C内的状態)をあらわすので、両形式をとることのできる形容詞であっても、形式の違いによってあらわされる文法的意味は異なる。

- ・ウトウツラーリ[°] パナスウ シー ツファヌ
ムメウ ウドゥカスターリ[°] (怖い話をして子

供たちを脅かした)

- ・アガイ、ウンシヌ ウトウリス クウトウ
ティマイ アリ[°]ナー (ああ、そんな恐ろしい
出来事もあるのか)

なお、連体形ではないが、形容詞による(被修飾)名詞の質規定は語根によって行われるのが最も優れた方法である(複合名詞的)。

- ・カレー ナガエ^グ アラーダタ^ムヨー (あ
れは長い歌じゃなかったよ)
- ・サティ^ム ツヴァ^ー アンシヌ ウトウリ[°]
クトウ^ー シー ネーン (さても君はそのよ
うな恐ろしいことをしてしまった)

〈連体過去形〉

連体過去形には接辞「^ム」を含まない形のみがあり、非過去形にみられたような語彙的意味の違いによる形式の対立はない。

- ・クヌ、デー^ン チューシャータリ[°] ウスマイ、
ウスンケー ^ムマリリ[°] マイヤ ニンギ
ンドウ アタリ[°]ガドゥ、(この、1番強かつ
た牛も、痩せた牛も、牛へ生まれる前は人間
だったけど、)

〈中止形〉

多段特殊型動詞の中止形に対応する2形式と(例「高くて」タカシャーリー、タカシャーリッティー)、
「語根+サ」からなる形式がある。前者について、「タカシャーリー」の形を第1中止形、「タカシャーリッティー」の形を第2中止形と呼んでいく。第2中止形には「(タカシャーリ)ッテ^ー」という異形態もある。

第1中止形は文を中止させるのにはあまり用いられず、特に自然談話では、尊敬形など補助動詞をとる形式の要素となることを主とする(尊敬形を参照)。一方、第2中止形は文を中止させる用法のみを持つ。

- ・リンゴ^ー アカシャーリー フヌーヤ キ
ュールシャーリ[°]ドー (りんごは赤くてみかん
は黄色いよ)
- ・アティドゥ ダイヌ タカシャーリッテ^ー、
^ムナー バシャッジー ブタリ[°]ドー (あま
りにも値段が高くて、皆怒っていたよ)

「語幹+サ」の形式はいわゆる連用形に相当する。あとに続く動詞や形容詞を修飾する用法、また補助

的な動詞とくみあわさって全体でひとまとまりの述語となる用法を主とする。なお、心理活動を表す動詞と組み合わせるその内容をあらわす「×プカラシヤ ウムー (嬉しく思う)」などの用法はない。

- ・ツファジメー、マタ ヤーンカ プトウイマ
イ ユナカドゥ ウブシヤ ナキヌバ ピス
ルヌ ナキヌ クイヤ ヨーイン キヌカイ
ン (ヤモリはまた家にいても夜中 (に) 大き
く鳴くから、昼の鳴く声は容易に聞けない)

第1中止形、第2中止形と同じく中止用法ももつ。

- ・クレー ウブシヤ、ウヌ パコー イミシヤ、
ンディガ ワーティガー (これは大きく、そ
の箱は小さく、どっちがいいのか)

〈仮定形〉

多段特殊型動詞の仮定形に対応する2種の形式がある。動詞の場合と同じく(タ)カーの形が主に用いられ、バの形はあまりあられない。

- ・クンシー アツチャータカー ヌーマイシラ
イン (こんなに暑かったら何もできない)
- ・アティドゥ タカシャーラバ コーナヨー
(あんまり高かったら買うなよ)

〈理由形〉

「語根+サ+ヌ」に由来する形式と多段特殊型動詞の基幹イ段相当の形に接辞「バ」が後接した形式の2つがある。どちらも使用頻度が高く併用されているが、後続節(主節)との関係性、文タイプの違いによって使いやすさの傾向がみとめられる。

「ヌ」由来の形では例えば、先行節のさししめすコトガラにより、自然発生的にもたされた事態が後続節で述べられることが多い。

- ・タカシヤン イクーカニブリ° (高くて(手が)
届かない)
- ・カナガイヤ フームヌヌ イキラシヤン、カー
キムヌテンドゥ アタリ° (昔は食べ物が
少なく、飢えた人ばかりだったよ)

バの形では、表現主体の意志や相手へのはたらきかけ、先行節を受けての発話主体の判断内容や行動が後続節で述べられることが多い。

- ・キューヤ ピーシャーリ°バ ウブシュディ
キヌウ キーリ° (今日は寒いから長袖の服
を着る)
- ・ククルヌ アティ ジョーシャーリ°バドゥ、

タスキー ワーリー ウェスシヤ (心がとて
も良いから、(神様が) 助けなされたんだよ。
なお、後続節が意志や相手へのはたらきかけをあら
わす場合、先行節の述語を「ヌ」由来の形に置きか
えることはできない。

- ・ウリ°ガドゥ {ムマシャーリ°バ/×ムマシヤ
ン}、ツヴァター ウルー ファイ (それが
おいしいから、あなたたちはそれを食べなさい)

〈否定形〉

「語根+サ」に「ネーン」がくみあわさる。間に助詞「ヤ」が挿入、融合して前要素末尾が長音化してあらわれることもある。

- ・クヌ イ°ゾー ムマシヤ ネーン (この魚は
おいしくない)
- ・ムットゥ アズマシヤー ネーンドラ (ちっと
も甘くないよ)

〈なる形〉

「語根+サ」に「ナリ°」(なる)がくみあわさる。このとき、くみあわさる形容詞はモノゴトの特性をあらわすものにほぼ限られている。

- ・ウヌ ユーカラ カギシヤ ナリ、(その
夜から仲良くなって、)
- ・ムツヌ カタシヤ ナリ (餅が固く
なっている)
- ・クバヌ パーヌ ヤリ°ラーシー イディーン
グトゥ、キヌムヌネン シー ンディリ°
バーヤ、カディフキヌ ツカシヤ ナリ°
(びんろう樹の葉が槍のように出ないで、切
り揃えたように出るときは、台風が近くなる)
また、「語幹+サ」には「ヌー」(する)もくみあ
わさる。くみあわさる形容詞が感情形容詞の場合、
共通語の「(ウレシ) ガル」に相当する自動詞のよう
になり、主体の感情的な態度をあらわす。

- ・ムメ ガンジューシヤ シー ワーリーリ° (も
う元気にしていっしょってね)
- ・クリ°マイ カーツジー ムメピ ヤツサ
シューマンナ (これも買うからもっと安くし
ないか)
- ・「ヌスタイ カンシー ブリ°ガ」ティー、ピ
ルマツサ シー ブリ°バドゥ、(「なぜこのよ
うにしているか」と不思議がっていると、

〈丁寧形〉

多良間島方言の形容詞には丁寧形に該当する形はみられない。

〈尊敬形〉

動詞と同じく、第一中止形に補助動詞「ワーリ[°]」がくみあわさって形づくられる。

- ・シンシーヤ タカシャーリーワーリ[°] (先生は(背が) 高くていらっしゃる)

〈のだ形〉

多良間島方言の形容詞にはのだ形に該当する形はみられないが、意味的には断定非過去形のダーリ[°]の形が近いと思われる。

【形容名詞述語・名詞述語】

多良間島方言では、共通語の形容動詞(ナ形容詞)に対応する語の多くは「語根+サ+アリ」という語構成をもち、サアリ形容詞となっている。例えば「きれいだ」は「キチギシャーリ[°]」、「嫌だ」は「ヤナシャーリ[°]」、「変だ」は「ピンナシャーリ[°]」である。だが少数ではあるが接辞「ナ」を伴って連体修飾語になる語もみられ、このような語を「形容名詞」と位置づけることとする。「ジョーズナ」「ガンジューナ」などサアリ形容詞の語根を基とする語もある(「ジョーズシャーリ[°]」「ガンジューシャーリ[°]」)。形容名詞は名詞と同じく、それ単独もしくは終助詞が後接した形、あるいはコピュラをともなって文の述語にもなる。

〈断定非過去形〉

形容名詞と名詞のいずれも、断定非過去形は共通語の「だ」に相当するコピュラ(学校文法の「断定の助動詞」)は伴わず、それ単独か終助詞が後接した形をとる。

- ・アガイ ダイズ (ああ大変だ)
- ・ツヴァンダ^ム イジヤイカー ジョーブンドー (あなたにさえ会えたら充分だよ;「ドー」が終助詞)
- ・キューヤ イー ワーツキヌ (今日は良い天気だ)
- ・アガイ、ツヴァー ウプミパナナー (あれ、あなたは大きい顔だね;「ナー」が終助詞)

〈断定過去形〉

形容名詞と名詞のいずれも、断定過去形は「ダタ

リ[°]」が後接した形式となる。助詞ドゥと存在動詞の過去形アタリ[°]がくみあわさった形式があらわれることもある。

- ・カマヌ ヤーヤ カナガイヤ トーティヌ ジョートーダタリ[°] (あそこの家は昔はとても上等だったよ)
- ・コーチョーシンシーガ ヤーヤ カーラヤーダタリ[°] シャー (校長先生の家は瓦家だったよね)
- ・キューヌ ピンダアースエ[°] イーシュー ブドゥアタリ[°] (今日の闘山羊はいい勝負だった)

〈推量形〉

形容名詞と名詞のいずれもコピュラは伴わず、終助詞「ゲーライ」「パズ」が後接した形となる。

- ・カリ[°]マイ ジョートーゲーライ (あの人もいいかな)
- ・ジューネンブリゲーライ、ムットウ カワリーランナー (10年ぶりかな、全然変わらないね)
- ・ウレー カマヌ ユミパズ (それはあそこの嫁だろう)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、形容名詞は接辞「ナ」を伴う形となる。なお、数例ながら連体格助詞「ヌ」を伴う形もあらわれているが、これは石垣方言などからの影響によるものと思われる。

- ・アー、クヌ ンナーダイズナ ンナ (あー、この縄は大事な縄だ)
- ・ツヴァガ キンヤ ジャウトウーナ ガラナー (あなたの着物は上品な柄だね)
- ・アリー ミーン ジョートーヌ ツファドゥアタリ[°]ティー イーバ、(めったにない上等の娘だったそうで、)

また名詞には「学生である人」に相当するような形式はなく、連体修飾は連体格の「ガ」あるいは「ヌ」を後接させた形で行う。

- ・タローガ シュムツ (太郎の本)
- ・カミヌ クガ (亀の卵)

〈連体過去形〉

連体過去形はいずれもダタリ[°]の形となるが、実際の使用頻度は低い。

- ・ヤラビシャーリ[°] ケー ダイズダタリ[°] ム

ノー ナマガミ ウブイードゥ ブリ° (子供の頃大事だった物は今でも覚えている)

- ・ミダ ガクセー ダタリ° ズブンヤ マド イスカマイドゥ アタリ°ルガドゥ (まだ学生だったときは時間がたくさんあったのに)

〈中止形〉

断定非過去形と同じく、形容名詞と名詞のいずれも共通語の「だ」に相当する語尾(あるいはコンピュータ)は伴わず、それ単独の形で文を中止させる。

- ・チョーナンヤ イシヤ、ジナンヤ シンシー (長男は医者で、次男は先生だ)
- ・ウェレー ギ_スピ_スン、ケレー ハデティードゥ シャンユテーション ユミーリ° (こっちは品がなくてそっちは派手だと文句ばかり言っている)
- ・イムヌ ウプムノー タク、ウイヌ ウプム ノー クブ、アンシヌ パナスヌ アリ° (海の大物は蛸、陸の大物は蜘蛛、そのような話がある)

また名詞の場合、目的語に「スー」(する)の中止形「シー」がくみあわさった形式も文の中止に用いられる。

- ・トグチェー タダ クバガー、ニンギンヌ ヤットウシー クマリ°ダキヌ トゥクルー シー ウコー ウップガヌ トゥクローバ シー (戸口はただこの大きさ、人間がやっつで入るだけの所で、奥はもう大きい所で、)

〈假定形〉

形容名詞と名詞のいずれも多段特殊型動詞の2つの假定形それぞれに対応する形式をもつ。

- ・クンシーナ アタカー バンマイ シライリ° (このくらいだったら私もできる)
- ・ツヴァー アタカー イカイドゥ ス (お前ならできる)
- ・ウシューガナスヌ ウイスグトウ アティカー、ズピナイナムヌ (御主加奈志のご命令なら仕方ない)
- ・カリ°ガ ジョーズ アラバ ヤラシ (彼が上手だったらやらせよう)

〈理由形〉

多段特殊型動詞の第1中止形に対応する形(「アリー」)と基幹イ°段相当の形に接辞「バ」が後接し

た形(「アリ°バ」)の2形式がある。動詞および形容詞とは異なり、形用名詞述語、名詞述語の「アリー」は文の中止にはならない。

- ・ウブシュディヌ ジャマ アリー シュプギ_ス ニー アディガキ_ス スタリ° (長い袖が邪魔なので、たすき掛けにした)
- ・クレー キ_スリパスヌ ムメ アリードゥ ヤッサータリ° (これは切れ端だから安かった)
- ・イミヤーガマ アリ°バ イバーイバ (小さい家なので狭苦しい)

またアリーの形は、疑問詞とともに疑問文の終止に用いることもできる。

- ・ツヴァター ヌバシーヌ カンキー アリー (あなたたちはどういう関係なのか)

〈否定形〉

多段特殊型動詞の否定形に対応する形(「アラン」)となる。名詞と「アラン」の間に助詞「ヤ」が挿入されることが多い。

- ・クヌ アカパンヤ タダヌ パンヤ アラン、クレー ウカットウヌ ニンギンヤ アラン グマタ (この赤い斑紋はただの斑紋ではない、この人は軽々しく扱える人間ではない)
- ・ガビョーティーヤ イクトローターマ ア ラン (痩せていることとはいいことばかりではない)
- ・ウンシヌクトー ダイズ アラン (そんなことは大切じゃない)
- ・クヌ ガラー アティドゥ ハデ アラン ゲ ーライ (この柄はあまりに派手じゃない?)

〈なる形〉

格助詞「ン」がついた形式に「ナリ°」(なる)がくみあわさる。

- ・ウマンケー ウツキ_スタカー ジャマン ナ ラズー (そこにおいたら邪魔になるよ)
- ・ムマガー シャナーリカラー ショー ガッ コーン ナリ° (孫は再来年からは小学生になる)

〈丁寧形〉

多良間島方言の形容名詞、名詞述語には丁寧形に該当する形はみられない。なお、「アリーユ」を用い

ると柔らかい表現になるようである。同種の形式は動詞、形容詞にもあらわれており、今後考察が必要である。

- ・カタウ ムマイタカー イーククツ アリー
ユ (肩をもんでもらってよい心地だった)
- ・カヌ ッファー ユードウ ガンク アリー
ユ (あの子はあまりにも頑固だ)

〈尊敬形〉

多良間島方言の名詞述語には尊敬形がある。助詞「ドウ」を伴い、多段特殊型動詞の第1中止形に対応する形に補助動詞「ワーリ」がくみあわさって形づくられる。

- ・マーリ°スタリ° シューヤ ユードウ キツ
ピストウドウ アリー ワーリ°タリ° (亡く
なった祖父はとても厳しい人であられた)

〈のだ形〉

多良間島方言の形容詞にはのだ形に該当する形はみられない。意味的に対応する語形についてはさらなる調査、考察が必要である。

用例出典

民：多良間村役場 (1981)『多良間村の民話』

参考文献

- 沖縄古語大辞典編集委員会 (編) (1995)『沖縄古語大辞典』角川書店
- 狩俣繁久 (1997)「宮古方言」亀井孝他編『日本列島の言語』三省堂
- かりまたしげひさ (1986)「宮古方言の「中舌母音」をめぐる」『沖縄文化』66、沖縄文化協会
- かりまたしげひさ (2000)「多良間方言の系譜—多良間方言を歴史方言学的観点からみる—」『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』琉球大学法文学部
- 下地賀代子 (2006)『多良間方言の空間と時間の表現』学位論文 (千葉大学)
- 下地賀代子 (2015a)「南琉球・多良間島方言の動詞形態論」狩俣繁久編『琉球諸語 記述文法 I』(科学研究費補助金「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」(課題番号 24242014、研究代表者 狩俣繁久) 研究成果中間報告書)

- 下地賀代子 (2015b)「多良間方言 (沖縄県宮古郡多良間村)」小川普史編『琉球のことばの書き方』くろしお出版
- 高橋俊三 (1993)「多良間島の語彙 (中間報告)」『多良間島調査報告書(1)』地域研究シリーズ 19、沖縄国際大学南島文化研究所
- 高橋俊三 (1997)「古典琉球語」亀井孝他編『日本列島の言語』三省堂
- 仲原稜 (2014)「沖縄県那覇市首里方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (2) 活用体系』(科学研究費補助金「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号 21320089、研究代表者 日高水穂) 研究成果報告書)
- 名嘉真三成 (1983)「琉球宮古方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』26
- 名嘉真三成 (1992)『琉球方言の古層』第一書房
- 中本謙 (2014)「沖縄県宮古島市平良下里方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (2) 活用体系』(科学研究費補助金「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号 21320089、研究代表者 日高水穂) 研究成果報告書)
- 又吉里美・下地賀代子 (2010)「琉球方言における形容詞の比較研究：津堅島方言と多良間島方言」『南九州地域科学研究所所報』26、鹿児島女子短期大学
- 又吉里美・下地賀代子 (2011)「(続) 琉球方言における形容詞の比較研究：津堅島方言と多良間島方言」『南九州地域科学研究所所報』27、鹿児島女子短期大学
- 宮城信勇 (2003)『石垣方言辞典』沖縄タイムス社 (下地賀代子)